

ダーラム市、ポートランド市紀行

安東直紀 京都大学大学院工学研究科特定准教授 + 野本慎一 京都大学大学院医学研究科教授

去る平成22年11月、我々は安寧の都市ユニットの海外視察第1陣としてアメリカ合衆国の東海岸に位置するノースカロライナ州ダーラム市及び周辺地域、それに西海岸のオレゴン州ポートランド市を訪問・視察した。ダーラム市は全米で最先端の医療研究機関であるデューク大学を中心とするまちづくりと、周辺の自治体とともに先端企業を誘致して全米最大規模の研究都市を形成していることで知られている。一方、ポートランド市は、LRT（Light Rail Transit）を用いた都市再開発の成功事例として知られている。これらの都市の特徴を知ることが安寧の都市を考えるうえで有効であると考えた。視察においては工学系と医学系の教員が同行することで、医工融合に有益な意見が相互に得られると期待したとおり、普段とは違う視点を意識する有意義な経験となった。

ダーラム市は、隣接するローリー市、チャペルヒル市とともにリサーチ・トライアングルを形成している。人口22万のダーラム市は、デューク大学があり、かつてはたばこ産業で栄えた地として知られている。ローリー市は人口40万のノースカロライナ州の州都で、ノースカロライナ州立大学がある。チャペルヒル市は人口5万で、ノースカロライナ大学の位置する典型的な大学都市である。リサーチ・トライアングルには現在170社以上の高度な研究機関が集積し、42,000人を雇用するなど、現在も人口が増加している地域であり、いくつかの日系企業もここに研究所をおいている。これによりノースカロライナ州の博士号所有者数はシリコンバレーを有するカリフォルニア州を上回り、全米で最多となっている。

都市を経営する感覚が不可欠

ダーラム市の視察では、デューク大学The Fuqua School of Businessの日本人留学生コミュニティの幹事をされている朝田氏に、視察にかかるさまざまな便宜を図っていただき、現地での生活について生活者の視点から感想を伺った。先にも記したように、デューク大学は脳神経外科において全米でも

最高水準の医療機関として知られており、日本から多くの医師が留学生としてデューク大学に派遣されている。また朝田氏の下宿先の大家さんに夕食に招かれ、地域の住民の方々（いずれもデューク大学の関係者であった）と地域の実情について意見を交換した。

翌日はノースカロライナ州立大学の日本センターに出向き、センター長のBaugh教授および土木工学科のRanjithan教授、List教授と意見交換を行った【写真1】。

さまざまな視点から意見交換を行ったが、いくつか特徴的な意見を伺ったので紹介したい。まずユニット名称である安寧の都市を英語では「住みやすい都市」を意味する“Liveable City”と訳しているが、安寧は住みやすいを意味するだけなのか、というものである。これを受け、外部の方にも説明できるよう、安寧の都市の概念を再度整理する必要があるのではないかと考えるに至った。この議論の延長線上で、交通・医療・都市計画など単一の断面で考えるだけでは、住みやすい都市を実現することは不可能であり、安寧の都市を実現するには首長の視点に立って都市全体を経営する感覚が不可欠であるとの指摘を受けた。

リサーチ・トライアングル周辺には先進企業が集積しており、そのため税収も多く得られている。その潤沢な資金を使うことで、はじめて高齢者福祉をはじめとするまちづくり施策の実施が可能となっているとのことである。つまりは、高齢者福祉のみに焦点を当てた施策は持続可能でなく、社会資本の充実には産業の集積が必要であり、高齢者にも優しいまちにするには税収をもたらす若年層の存在が不可欠であるというものである。したがって、都市には適当な世代混合（Generation Mix）が重要であるとの指摘を受けた。この視点は、ともすれば高齢者の対応に目が奪われがちな安寧の都市の概念を考えるうえで、たいへん有意義な示唆であると感じた。

訪問は11月上旬であったが、滞在中は曇ひとつない快晴が続き、快適な滞在であった。現地で話をお聞きした住民の方は、リタイア後にノースカロライナに移り住んだのだが、四季もあり冬も温暖なこの地をずいぶん気に入っているとのこと



▶写真1 NC Japan Centerにて、Prof.Baughと



▶写真2 快晴のダーラム市ダウンタウンたばこ工場跡地公園

あった。彼によると、アメリカでは体の自由がきく間はノースカロライナが人気で、体調に不安が出てくるとより温暖なフロリダに移り住むのがトレンドであるとのことであった。日本の四季に親しんだ者としても、ノースカロライナはずいぶん住みやすい地であると感じた [写真2]。

LRTへの期待過剰への戒め

ダーラム訪問後、西海岸のオレゴン州ポートランドに移動した。オレゴン州はワシントン州とカリフォルニア州に挟まれた地にあり、ポートランドは人口56万でオレゴン州最大の都市である。快晴続きのノースカロライナとはうって変わって天候は不安定で、標高の高い場所では時折雪が降るなど、気候の違いにも驚いた。しかし、かえってノースカロライナがリタイア層に人気な理由のひとつが理解できたような気もした。ポートランドにはナイキ、コロンビア・スポーツウェアといった有名企業も本社を置いており、半導体のインテルの研究所もある緑豊かな街である。

アメリカでは医療産業が大規模産業として成り立っており、2007年のデータによるとポートランドにある企業の総従業員数ランキングで1位はインテル、2位のProvidence Health system についてオレゴン健康科学大学は第3位の総従業員数であり、第7位のナイキまでのうち、医療関係企業（大学）が4社をしめていた。ヘルスケア、教育施設などの充実がポートランドをして、快適で住みやすい土地たらしめているのかもしれない。

ポートランドでは、ポートランド州立大学のFirst Stop Portlandという組織が窓口となり、国内外からの視察・訪問団への便宜を図っている。今回我々もFirst Stop Portlandに訪問の趣旨を伝えたところ、オレゴン健康科学大学を含む現地の視察と公共交通を運営しているTriMet（トライメット）



▶写真3 ダウンタウンを走るLRT

の計画担当者との面会と、ポートランド州立大学の都市公共研究所の訪問を調整していただいた。

ポートランドはLRTを中心とする再開発の成功事例として都市計画の分野では広く知られている。ダウンタウンでは無料のLRTが市民・観光客の足として活用され、自動車交通の削減に成功しているとのことであった [写真3]。実際に現地を見て感じたことは、ポートランド及び周辺地域は道路ネットワークが完備されており、LRTは地域のシンボルではあるがLRTだけが現地の交通需要に対する解決策ではないことであった。また、ダウンタウンでは乗降無料となっているが、その範囲は狭くて十分に端から端まで歩けるほどである。市内の交通量も京都市内の中心街と比べても圧倒的に少なく、このLRTを京都をはじめとする日本の大都市における交通の解決策とするには条件が違いすぎると実感した。

TriMetの計画担当者によると、TriMetの経営は赤字で州の補助金を受けており、かつては無料であった市内のバスも現在は有料化され、行政からは補助金を削減されていた。富山市で運行されているLRTは黒字経営であることを考えると、公共交通の経営に関しては富山の方がポートランドより優れていると言えよう。

ポートランドではダウンタウンを含め自転車道の整備が非常に進んでおり、多くの市民が自転車を利用していたことが印象的であった。

それでも、ポートランドでは現在もStreetcar（路面電車）の延伸を計画中であった。経営が赤字の中でも路面電車を延伸する理由は、事業としてよりもむしろ低所得者のモビリティの確保が主たる目的であり、設置・撤退が容易なバスでなく路面電車を導入するのも、市として低所得者に対する長期のコミットメントであるとのことである。このように、公共交通においても単なる採算性だけでなく、多面的な視点からその意義を認めている点が特徴的であると感じた。

ポートランドでは中核的な医療機関であるオレゴン健康科学大学も見学した。オレゴン健康科学大学はオレゴン州の公立大学で、付属の病院は総合病院、小児病院、復員軍人省医療センターからなる大変立派な施設であったが、それらの多くは寄付により建てられたとのことで、その規模に彼我の差を感じずにはおられなかった【写真4】。病院は高い丘の上であり、非常にアクセスの悪い立地で、ロープウェイが設けられていた。そのロープウェイも大学が設置し管理しているという事実には驚いた。病院の総従業員数は11,500人と大規模で、前述の通りポートランドで第3位の「従業員数」を誇る事業所である。京大病院の医師・看護師を合わせた2,717人と比べても、その規模の大きさがわかる。日米で同程度の病床



▶写真4 オレゴン健康科学大学の病院

	テキサス大学癌センター	愛知癌センター
ベッド数	456床	473床
ベッド利用率	88,2%	95,8%
職員数	14,250	881
医師数	663	95
看護師数	1,800	318
薬剤師数	924	13
総収入	1,639億円	133億円

▶表1 日米の病院職員数



▶写真5 Hood山

数を持つがんセンターを比較したデータでも職員数は10倍以上の開きがある【表1】。これらの比較からもわかるように、我が国の医療は関係者のひたむきな努力と犠牲的精神で成り立っている。

ポートランドを訪問し市内を視察した感想であるが、丘の上からは遠くにHood山も見える大変美しいまちであり、この地に愛着を感じている住民が多いようであった。ダウンタウンの規模はそれほど大きくないが、歩行者が多く行き交い、きれいで活気のある街であったことが印象的であった【写真5】。

おわりに

最後にダーラム市とポートランド市を訪問して両市で共通して感じた点、および両地域で意見を交換した研究者から奇しくも同じコメントを受けたので、それらを紹介して拙文を終えることとしたい。

まず両地域はそれぞれ異なる特徴をもつまちづくりをしていたが、共通するのは圧倒的な土地の広さとその地に張り巡らされた高度な道路ネットワークの存在である。それらの基本的な社会資本が存在したうえでの高度な産業基盤の集積とLRT網であることを忘れてはならない。したがって、そのような前提が異なる日本で全く同じモデルを適用することは不可能である。

両地域の研究者に「健康で暮らし続けられる都市を実現するためのヒントを探して視察に来た」旨を伝えたと、全く同じ趣旨のコメントを受けた。すなわち、「地下鉄網が張り巡らされ、しかもスケジュール通りに運行されているので自動車を使う必要がなく、1ブロックも歩けばどこでも24時間利用可能なコンビニがあり、急病になっても救急車が無料で利用でき、国民皆保険により誰もが経済的な心配をすることなく最先端の医療が受けられ、誰でも夜中に安心して歩ける。そういう日本の大都会より安寧な都市が、この地球上で他にあると思っているのか」というものである。このコメントが、「我々が追い求める安寧の都市像」を再考させるきっかけとなったことは間違いない。(文責：安東直紀)